



“源溪山だより”

https://chouanji.p-kit.com/ 令和8年2月③
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmob.jp



◆智慧と福德の虚空蔵菩薩様

三十三回忌ご法要を司るのは虚空蔵菩薩こくうぞうです。空虚くうきよ（くうきよ）と言えは内容や価値が無いこととかむなしいことというマイナスの意味で使われます。

虚空こくうとは、何も妨げるものがなく、すべてのものの存在する大きな空間という意味になります。

そして虚空界と言えは、色もなく形もない本源的な真如の世界を表します。



右手に宝剣、左手に如意宝珠にぎぎょうを持している像型が多いようですが、右手が与願印よがんいんの御像などのこともあります。



虚空蔵菩薩は「智慧と福德の仏様」と言われます。宝剣が智慧の、また宝珠が福德の象徴です。

虚空蔵菩薩と対の存在とされるのが地藏菩薩です。地藏菩薩が「大地の蔵」であり、虚空蔵菩薩は「虚空の蔵」となります。

「大地の蔵」はすべての“命の源”を示し、「虚空の蔵」は“大宇宙の理ことわり、すなわち広大無辺の智慧”を示しています。

虚空蔵菩薩の智慧によってすべての人々に安楽と福德の利益りやくがもたらされるといわれます。

十三仏の掛け軸では一番上の方に描かれることが多く、不動明王（初七日）から始まり、虚空蔵菩薩がラストバッターです。

三十三回忌は清浄しょうじょうほんねんき本然忌と言います。清浄な自然本来の姿へと還っていくというような意味があるようです。無限の智慧を授かり、完全な円の如くの仏様となられ、子孫や縁者を見まもる祖霊になられる大切な節目となる法要です。

◆いろは歌

「いろは歌」は、お釈迦様が80歳で亡くられるという入滅前後を記した「涅槃経ねはんぎょう」というお経の中のことばを元に行っていると言われます。

いろはにほへと ちりぬるを
色は匂へど 散りぬるを
わかよたれそ つねならむ
我が世誰ぞ 常ならむ
うるのおくやま けふこえて
有為の奥山 今日越えて
あさきゆめみし ゑひもせず
浅き夢見し 酔ひもせず

（現代語訳例）

色とりどりの花は香り豊かだが、いつかは散ってしまうこの世に生きる人々の中で、

誰が永遠に生き続けられようか
移ろいゆく世の中という深い山を今日越えて
もはや儚い夢を見ることもなく、

現実の虚しさに酔うこともない

いろは歌は、平安時代中期にすべての仮名47文字を重複なく1回ずつ使って作られた七五調の文です。弘法大師の作という説ほか諸説ありますが、文学的にも高く評価されています。



散りぬるを
色は匂へど
わかよたれそ

上記の他、訳文はいろいろありますが、全体の文意は“人生の無常と、それを超越した悟りの境地”を示しています。